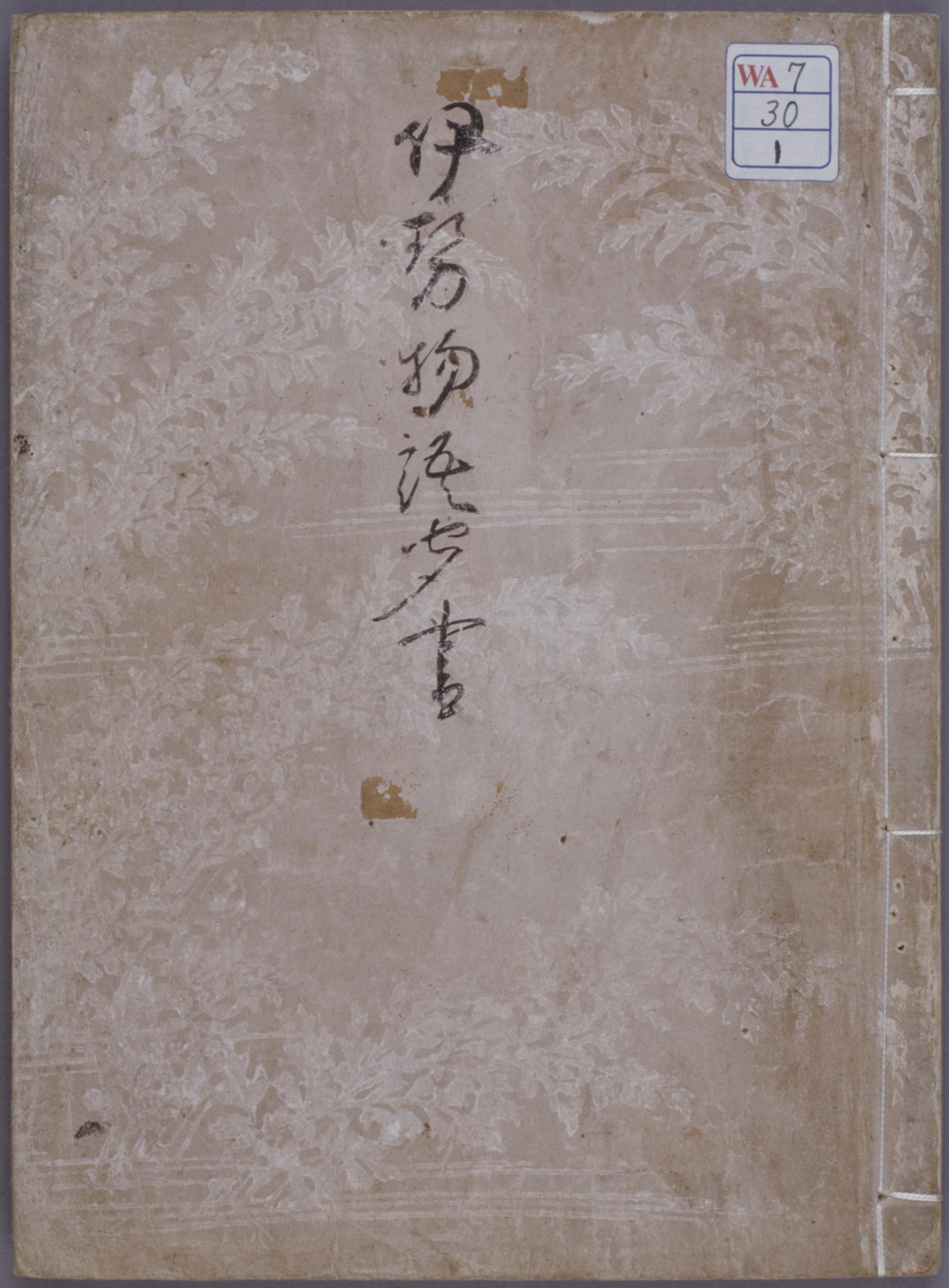

伊勢物語聞書

WA 7
30
1

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-001
国立国会図書館

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-002
国立国会図書館

三百六拾五

伊勢物語聞書

一此物語を伊勢といへる事古注に法
男女の物語といへり其故ハ伊勢の二
字ハ男女となむよまれしといへり於
に付て種々乃義どもあり　莵角不用之
一伊勢物語といへるハ業平朝臣に伊勢に
下し時斎宮に逢奉りし事此物語
の肝心なれハ仍伊勢とハ名付といふ義あれ
見をたりける業平朝臣の事を謂に

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-003
国立国会図書館

かゝる事あれは定家卿被破之遊してこ
の物語の作者更故人説不同也あるハ
業平自記と号し或ハ伊勢といへる
女のかける由みえたり仍定家卿も難
决之り 奥書在之 ありハあれと非殺
等作者何様伊勢守と侍れハ黄門の心
も伊勢作をもつて此物語は題号とす
とみえたりされとも当流用之

一伊勢か作なきとも或説守る御門へた
てまつるよしをそれハ当流不用之畢
竟作物語と見侍へき也さ様と源氏物
語の様ふハあらす此内は業平自記の
詞もおほく交へ業平一期の事を書る
やうに多く舊事をとりよせてつ
けたる所皆作物語の作法也 一条禅閤
の御注にも作物語也とみえ侍る又業
平以後の事もかきる所あれ

一むかし

伊勢物語をハ昔と書る也是迄によりて
すゑぬるを昔と云なるへし伊勢集に
りしめ乃詞に以後まて乃時よりの文の
息不と書れと時乃変をも昔と書を心
用きりや　一条禅閤の説にも昨日
ハけふ乃むかし ちよ年ハこよひ乃昔也
と云く又むかしといふ詞に業平没
多歟ニもゐるりあわ可愛師説
好とこ

在中将の事也随てむかしきも用し
うゐかうふり
元服乃変也古注にハ義和七年十六歳
と云ゝめり古注の勘わ遠のありり多之
難用之又叙爵の説不用之古注乃義ハ
うゐかうふりしてならの京にうわ
志たうをとつけてうるりや当流ハしりり
難すうぬりうふりしてとハ業平元服
乃始めを書れその後に叙そしれ叙爵

乃来り猶しらぬ事我とわにいふ
なわと記志らぬ也りしめるうゐらう
ゆわ我書てすへり縁衆の事を書わ
一部於心得くたわ則此物語全篇之心
也
志ぬうしきて
業良ふ業平能知於不知下也則お不見
かくともいへ物語ふ記しうるうへハこを
分ふかぬつし業平ハ平城乃浅孫也南

於ふ能知乃ひへき事ハ勿論也
うわにいふなわ
業平何とふく猶をしして遊たるなる
つし一禅内説同之むりしハ心のま
福ふ猶をしきぬ也
ゐまめひうる
かめこぬ詞也娟の字也
まうかうすゝなわ
此兄弟於女誰ともをまし此物語乃らん

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-006
国立国会図書館

よみおきあへられしかはいひかなにて及はす
名をあらはさぬ歌をは誰ともしれて
かくへし当流義也和哥乃讃人あられ
のことし　一禅師説同之古注には
是業の姉妹と云ことありしをにられ
てよむ人あわ業平理無
りいまうえてなわ
惟関見也只物うしたゝと小前のにみ
する心なるへし一説義優なるへし源氏

物語なとにみゆ
たもれしす　かう源古へ
によき女乃ある哉みゆる心也
ひとりしるなくて
慈よ源不よ見てする人の思ふのかよあ
源心也たとへはよりきもの清よくあ
うる事なとをりしたまとりぬう
こゝしいたは源心也強字也
心ちまのとひになわ

思ふをつけたる心也
わきまへりすることをきはめて
こひの切なる余り乱たる思ひをしら
せんために忍すれれすそをきはめて書を
やりて侍りとするなり
忍すり
或ハ独楽とすれ独夜をも用たれハ
一禅ハ説
りすり野の忍草

是ハ野の忍草とハ元りすり野なれハ也
忍草をハ女をたとへていふ也下句ハこ
まとふる思ふのかきわもしらぬう
なとよりんとハ忍すりハ乱たる物ふ
ましは也
をいはきて
人の返付へなとハ見るへしてひ彼女の
りたる不なきるひろてはゝハ
す心也

はいりてなりしろき
河原左大臣乃哥を今女乃返哥に用た
るハついそきつ添ハき事とや思ひ
侍らんといふ心也
みちのくのしのふもちすり
融公乃哥弥心ハ誰ゆへよりみたれそ
めし君ゆへによう融ぬまとといふ心也
上句ハ序也古哥ニ序哥とて何事ニて
もいひて末ニ心を述る也こゝに優ふ

るゝし也
といふ哥の心いんなり
女の返し此注也こちのく此哥河原
乃おとゝの作を用かへて返しにき
こ添事也と女乃心ハ誰ゆへ於思ひ
まよりまうん我ゆへまよハあらしとや
ぬ侍え然わりまし又一説お左中
ぬ非幾院をめ旨定注可見
いありやき

早卒也うちつけなる心也
みやひ
ふさけとかりし心也定注嫁字乃心よ
も通すへし
一むかし男ありけりならの京ハはなれ
桓武天皇延暦三年奈良よりこの京
をうつさんとて先長岡に都して平安
城移西京よりハ此男ハ東京を首尾せし
時分乃事也先とく乃わかりける西京に

まだ定らぬ也
西の京に女ありけり
此女誰ともしらず注二条后云々不用
之
その人かたちよりハ心なんまさりたり
ける
まのうちに世にすくれし人なるへしり
ひとり人なきハ業平は心をつくしける
むことわさりける

ひらのこともあしくさわけりし
都とこなる人といふ也
きのめ都とこ
業平を実なる人といふ心也余ことは
てつくいわ
雨うちふる
悲しき細雨也おほわかのやう思ふへし
ー
おきのもしらねともそれ

あるいは玉ちるてふもりひかし藤乃苗
も植さるは妻心也むくらの宿に思ひ
のあ添やうにいふし以哥よわりしめ
て後しく乃哥とい藤乃宿を思ふ乃あ
為所のやうまよあわ陳辰の心なわ文説
あわ

二条乃后のまうみかとふも
伊勢り書る詞ありし業平乃所行
をたすけて人よそへ此時と書ると

云く又母后以前為孫事しけりや侍らん

一東の五条　ミ家乃東家此事也

大きさいのみや

染殿后也清和母后也五条后とも申

西のたいに

染殿の内ニ於西対也二条后を此対に

なきさそしまつり給へわ

本いにハあらて

あらハにハあらて也又ハ本意にハあらて

て也

心さしふかゝる　密通乃こと也

かよふかくれにかくれ

密通不亡強之般也古注ニ長良卿乃

むかしハと云こともやありつらん

みとうしと思ひしけん

能愛とも也大かふも通しつき人なるに

あまりさんへみにうくれたまは称うし

と思ふ也

思ひけくなん
はくとよめる詞まて様なへなる心あ
思ひつくて月はのうつれうる心阿
りされハ又乃年此正月と次の詞よ書る
又乃年のむ月に
時節よおとろきて思ひ乃切なる心也
去年乃此比をのそしハ通しくなる事しふ
とさしまへくて感を思ふへし
梅の花さかりに

世ゟ乃梅かりよろちまる心也思す
の僅し也
ありしなるいたしき
あまさうていたしきあるへし此時の
りすしき様よゐるわあわ
月や
月やあらぬ春やむかしの春
月やあらぬハとかめてよめる也心を
春もミし世代月春も昔乃春爲男も又
もとの身ヽ身也とひふ心也みなかうした

いつはりぬるを人に逢事ありふりけれは
月もあらぬ月におもはれ春も昔の春と
もおもはれす我身ハもとの男とも思ハ
ぬよし也我身ひとつハもとの身のまゝに
あこかれすしてゆるへところなくうけれ
をいはんとすれは文字ハ卅一字なり
けあまれはをまつ心にまかせてをくる
心をあまりて詞たらぬの心也此哥の類
古注の及ふにあらん俊成卿の管説也

ミて工夫すへき事也いくたひも彼月
やあらぬと乃様へわ
扨乃かのくと
此詞よりつゝくも悔しき深心尤良なる
へし其人威に此示をさしつかはし也
一 むかし男ありけりいと思ひて
お殿と聞し二条后事也
人志らくもありけれと
思ひてかよふ所ありけれハ也

あるしゆるしてけり
染殿后事也　少将にて也
人まきれぬわりけりひちの
五文字は て乃人まきれぬ男なといふ
りこしことりは吟り也ことく吟
していつまの哥をも心を忘はす
事也
心やさあら
染殿后の心をすまし業平をいたはり

膝照し　病やうなる心也
せうとたち　二条后ハ兄弟乃事也
一むかし男ありけり　女のえうましかりける
得えかたき也　二条后の事也
ぬすみいてて
思ふあまりに女をさそひいてて行心
添つし
あくた川
内裏のうちなる塵なとを流す川溝名

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-016
国立国会図書館

乃事ニ云ニ作しむきてハ攝州芥川
と書るにや作物語のさ海あるへし
草乃うへにをきゐたりける露を
かれは何ぞ也かれ何なとなむ問ひ給ぬ
かく露なとをも問給へるにや心乃まゝ
とつるさまゝ也
ゆくさきおほく
行先も遠く思ひ乱るゝ時ハこた
へもせぬ也

おにある所に
女をとらへ隠しける人を鬼といへり詞に
ふかくおそろしき心あるへし古注鬼
魯の事一切不之義也不可用之
神さへいといみしうなり
此時神なり雨ふりておそろしきとわ
あつめかなふ心也
くらに。
はやくもそも人をまかせやうあるにや

座乃字をくらともよむ此義可然一説
此説用之
弓やなくひを
心のぬけたる躰をいへりと云〻此義可
負弓矢事めは只はかはりたる事なり
くつける成へし
はや夜も明なんと
此時ハ夜はやくあけよかしと思へきつる
なし此さるまくらも思乃拠に惚然とし

へるなるへし
鬼はや一くちに
こゝに人あわと申侍き家人の一云に
よわて女をとりぬしける事を一口
と云ハ余説不用之
あなやと　女の詞なるへし
あしすりをして　切にかなしむ心也
しら玉か何そと
右文字にぬ此歌とよめるハよろし

うつす此歌にとりては何ことゝうつし
たえいくるしかりさる也心は白玉と
やかん何そとやかんとみし時といふは
心也よく／＼思ひの乱に堪しせさかわし事
大切なる心也そのおもわ消えぬるは悲しい
ふかやの思ひ形なき心こもるも也
いとこの女御の
染殿后の御方也禁中にての事也
堀川のおとゝ

浅く称也哥を浅く長みつく侍りよく〳〵吟
味すへし理乃やすくきこゆる哥ニも
ハ能ふかく思ひ入て見侍へしとそ師
説申されしと云〻

一背男旅とする人　　誰ともなし
すミにもとむとて
旅ニ住居ひていへる也
志ふ乃あるあきまゐのなけ
此哥ハあさ淺乃山の奇妙なる哥とせよ

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-020
国立国会図書館

みなてうる也業平歌にのこすこてしり
かの山乃さまなとめつらしきにあらかお
小野の面白をしり心に感して是を
の人もそを哀と見行つましやといふ
心也旅ハりかしき物なれと時になた
思ひ乃奥ハさうする也かく工夫すへ
し　とう
一　着男なきえうなき物に
業平ハ五條三代の人なれと官位も無

行く路句流罷乃男となまとま仍聞形義
男となくさよし也
もとらわ友とかる人
上乃服に友とする人とかるによわて
もとよわとか思わ
見しれる人もなくて
業平乃ことをしす同道せし人も是を知ハ
にまし人なきよし也又是を知ハ常人
ふわともかの時の思には迷心あるへし

三河国
淺男ふとまゐて此国にうつれり跡也
水ゆく川のくもて
水縦横に行所なる—
橋を八わたせる
橋を必八ツわたすにあらねとあまたあるをいふ
数ハ一ツ又こなたかなたへわたるなり—た
八橋とのや
来れりける

羇中のさひしく心を取わて思ハ
—
かれ飯
旅りにあるさ飯也有馬皇子 孝徳 於子 歌に
あまたはけにもるいひをくさまくらたひへ
る事をあはれ
そのさハにかきつはた
杜若此所にて花を見る事躰を與にや
から衣きつゝなれにし—

此哥よきほくもるく清うしあまいは
皆夜の縁の字也其の哥なれは縁の句
おかくてあしらへしをは杜若を折
句にをけはくるしからす哥よむ人
こまかに思ひしさて哥の心を大かたにも
旅乃ならひをたはふれ事にまかせひて
かなしきを思ふ人を都にとゝめおき
ぬまは思の切なるよし也
かといふなりわ

ふかく感しこの心みえりくなりわ
ゆきくて
遠江なる色なる心なるへし
うつの山に
山中小径此さ海此時此人ゝ此思ふ此
さ海なまく心をやりて工夫すへし
蔦かえてハしけりて
繁茂るともよむ説あれとその字をとてよ
なは心読て感あり

すゝろなる
心なくさむ事也又辛字をもよむ
それ人の心もとなとて
誰ともなしやんことなき人のもとへ
なるへし
するかなるうつの山へのうつゝにも夢
にも人にあはぬなりけり
上ハたくするかの山なれハうつの序
寄也夢にも人にとハいりんなる也かき

夢にさへ人にあひ見ぬなけきを
いふ也うはく小もとといふうつの山をう
けていふんへき也やうハ事殊師
説形くてまたりしつハ事なりや
ふしの山を見れハ
時ハ五月也奇異形なる山又雪をかくし当
心也
時しらぬ山ハふしの嶺
五月に雪あれハ時しらぬ山ハふし

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-025
国立国会図書館

大なる川あり
　業平旅行の躰おくるしとあしすか
　しこゝもやはらかす遠國にはなれ
　ハ遠くなるに小路白大川あれは此川を見
　られて又いとゝ遠くハなりなんと
　を思ひし　都よ大なる川と書る詞ハ
　心あるへし　以下の詞ともありけれ也
　よそへやるやうなるものに
　舟にも乗かねたる躰也

しろき鳥の
　頭鳥の背ハくろく腹ハ白し
嘴
　嘴乃あかき事なり
　嘴はやうなくて大きなるとあれ　鴫の
　鶴鴬なとは大ならす
名にしおはゝ
　此哥ハ只武蔵と志もつふさとのなかに大
　なる川あれといふよりおこる人物なし
　くてといひさる折しも白き鳥と詞

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-026
国立国会図書館

によひよめるを此哥の心にこめてつかへ侍
へき也りきはめてもよき饋膳侍へし
かくこそわれて
傍人も感懐をもよほす心也
一昔男むさしの國まかりて
國にある家女婚とも云し
あていことく人に
女の父聟には業平にあはせん事
を通ゆかし思ひてこと人にとかゝる也

なを人とは大かたの雜姓なるとうらぬ歟
凡人なるへし　一說同之
はゝなん藤原
四姓の中にも藤氏は貴顯なれはかくい
へり藤のゆかりと思ひあはこる人は
都卿の心もなく風流なる人にあはせ
んと思ふなるへし　古注には父とは
有恒なれは母は良門也　云々系圖に引み
るその良門は女なし　業平は有恒の聟

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-028

国立国会図書館

30 40 50 60 70

忘るなよほとハ雲ゐに成ぬとも
此哥拾遺ニハ橘のたゝもとか哥と見
えたりかやうの事ハ此物語ニおほし
此物語ニ入てハ業平乃と心得へしかと
ハ雲井ニとハ遠さかり所ゟと云儀也め
くりあふまてとハ我立かへりて逢まて
ハ忘るなと云心也

一昔人のむすめを　たまさかとも申し
むさし野へゐてゆく

此段乃さ国殊に雑物語とこゆ人をぬ
すミてとゆく路につきそりからめられ
にくわとらるみ火付んとすとも書る
なはつ　此物語乃誹諧也
みちくる人　国守人なり
むさし野ハけふハなやきそ
此段の詞ハ業平哥あまたにくわ定
に書る也哥の心ハあらは也流すハ叙
事也

女をハとらへて
国ハ守於人〳〵女をかくしてけり也
下 昔武蔵なる男
業平変也京なる女雁ともなし 古注
四条后と云〻四条后とハいふ変難関歌
聞こゆれハはつかし
恋ち於なしひなれハ
むさしあふミと書て
かけてと云心也武蔵鐙とハいふ事ハ云

国より武蔵にあつめたるより出るを
用るゆへ昔ハ其国より来物を家物と
いぬ此号する事あれ一種に従
武蔵あふミさすかにかけて頼むにハ
かけてとのむとハいりん枕詞也といぬ
もはらしとてもうる所しとハ思中
乃きれの思ふ事しある故也まことに
恋ち於をりなきさ歯也
ゐハしつきぬち

めの君の心とゝまかくにとゝまりてくらす
しきりなる也
問いふとりけいうらむ武蔵あふみ
かハ思ふの一つこなたけまとハいり侍るなり
せんと思ふも我たへまひぬりやうの
事のあるおわのや人の志ぬなといふ
事もあるらんといふ儀也
一むかし男こ埋ハくよくすつ語よ
すゝろといハ心ありんとなつ辛代字をも

問ふこなたのまきともなし
申くふ恋なまふすいくそこにれ
心ハ恋と云物ハあひらの事をたの
むなさも侍らぬハせめさしなかんと
思ふなりうまきも又りありぬ心也さ
れハ中くゝ恋なまふてありいせめ
てくはこまもありはやと云也桑ふに
契約か為物也又いのち一年とあさる
物なまきをとわ合てかくれなる也

夜もあけハきつにはめなてくたかけ乃
きつにとハ狐也下略也くたかけハ家
乃鶏と云心也但庭鳥と心うる悪説也
心ハ夜あけて啼て思人をかへさせハ狐
にくハせんとのへたる也此段ニ用捨物
證也
くりはらのあねハの松乃人ならハ
是もともくろさきつ乃こゝ路れ人なら
ハと云事をいはんとへて作なる也心え

あねハの松を京人にたとへてきたりハ
田舎ハさき人なれハいさといはまし物をと
いふ也
よろこひて
東國の詞也思家らしとうとハ男乃
思ふゆるよしと女のよろこひて悦ふる也
一 むかしおとこてうとなき人
人をおろしめぬ詞也何条と云ハ人
おとしめないかしろに云事也さもふ

き人とハよろしき人と云也
あやしうさやうなくて
人のつまなれハかく思へり
志のふ山忍ひてかよふ
忍ひてかよふ道もかなとハ人の心の
うちへ忍ひてかよふ道もかなと云心
也ためつらしくて志つも詞也さし
贈哥也是ハ誠に業平ハ哥なとさへ
おかしく古哥をまねきと能て業平と書る

おかはりなし
さるさかなきえ
あく心也不祥也
えひす心とハ
あらむ方なくすくなるやうの心也さて
やうなき心まてをしまするまひなと
見てハいかゝせんと思へる也ではいの
まく文字なるさるけり也
一むかしきみのあわつね

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-033
国立国会図書館

業平志うと也
三代乃みかと
淳和　仁明　文徳也
世かはり
清和乃時乃事也此時ハ惟高まされ
御也惟高ハ名虎カ女静子乃腹にてお
紀有常ハ名虎カ子也
よの常の人のことくもあらは
女也をとろへたる躰也

こと人にもにす
よのつねの人ハまつしくてハへつ
らひ富てハおこりたかふるもあれと
也
あてなる事を
風流也有常ハ性をかへる也
よの常の事を志らす
世務をもしらぬと也
とこなれ

夫婦の中をたかふはく心也意の字也
あれのさきもちて戚なるか
又恒り妻の婦也
男まことにおもふこゝろしき事にて
又恒り妻我惺思ハしうたすくる
対義を堪忍せすしていかなるにおもて
まはぬ事生も又恒り心に謙ねむつます
志と思ハすおもひぬへしされともより
ることありしなるへし

これや此天のは衣むへしこそ
君かみけしとたてまつりけれ
業平きこの衣なとにかけしたるをあ
りれによりあうおしさのあまのはかく
いへわ心ハ二勝や天の羽衣にこそんと
光大やうふかみてこそりわなわくわ
君の着給ふ衣にハと自問自答した
るや
よろこびよみて又

一首にて我か思ふ心をよみて也
秋やくるか露やまかふと思ふまてに
あるハ涙乃ふるにそありける
秋やくるかとハ秋ハ人をうらみしむる
時分さハ秋の来て露袖を志ほるよりみ
露の我袖ハまかふきそぬらすかと思
まて我袖をぬらすハ只今我涙也くわ
と云心也それも我思ふまよひに我涙と思え
たる心也

一とし比
此段に首と云字なしりき落しこか
り又ミころとも書るまして此心も
ある歌
さとつれさわけける人
業平也あるしの安誰とも無し
あるかとみまよすみてれ
おもての心ハ桜ハ散やすくあたなれ
名よするてとりくまれふくる人をも

待わびぬればあだなりといふ也下は
心は業平は女をあだなりと兼ていひ
しかなと思てゆける也
けふこずはあすは雪
業平女がいへる返しをうつしてよめり我ま
ゐれはそあたなれなきやうなれあ
すれ雪とふるへしうきれ木のかたこゝ
ゆるも花ともいふへしといふ心也下
乃心はぬれりきるぬさきよきさまれ

うきと云心也
一むかしふ有心ある女
女とは小町也此段誰ともみえしさきこと
も業平の方へ哥をくれなとする事
業平乃好色お名誉秘は小町と名を
あらはせす隠心とはようきすあし
うきすと云題の心よりつへし男ちかう
きくわ男は業平也業平乃隣なる女か
菊の花のうつろへるをいふうつろひて

白き花なりとみへし哥よみしか

秋よくれハいまハ津らし雪乃

しら雪とハ中将乃心凡色みえぬを云也

白色ハ色凡本躰よりうつすふ色れ哥

き故也中将をりんへんしこの哥也

志らんよミに小町か哥をいへる哥

心を何ゆへとも志らぬ也大かたハ

業平も気ハかまへとも動せさる躰よし

かく書る也

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-040
国立国会図書館

くるくる雁ハ君か里ニ來ぬや秋ニ成て
てけつこうといふ心也
一むかし女いとうしこく
女誰ともなし又小町なとにもや
いかなることのあわれん
かけるハ妻事を不審する心也
思てハいふハ心の深しといひや
女男のあひくこのうらこゝ西深をいまつて
世中代人ハ此深をうけしけなき心の深

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-042
国立国会図書館

也露なるハ女のかゝる物なき所にわ
万葉にも面影と読なしハさら思やす
もんハ又やらんなる野邊のみのくといハ
不問心也
此女ハおしくきてねんしまひてにや
上の詞にいさゝかなく事にかてい
ましも堪忍の心なきによりて也又
今男の方ハ哥なとくわなとするも堪
忍せぬ性也

此哥の心ハいはぬゆゑに雨をさせるふ
しもなくてうりれ共てゆくへ又そ
乃まゝにゐなく立かへるにひとし
て更に定まる心なき我身なれあはさ[illegible]
さかり空の雲乃定なきによそへてい
へる哥也とハいひけれとも又別くの世
に感へな也此詞又妙也哥よりわつけて
ミるへし哥にハ身を観しぬれとも
又定まらぬ心なきるしをいは

一 はかなくて
女誰とはなしにはかなくてとハ何とや
らんしても絶ゆるなるへし
うきなから人をハえしも忘れ
是ハ人をはなれしとハ思へとも忘
れねハかく恨ても猶恋しといへり
かつと云詞ハ且またあらる也背ハかく
と云り 都(?)くつゝつか
さ かれをよとしのひて

同心しうか義也葉々もかく思ふとく
せぬ心をおこしてよめるなりわ
逢みてハ心ひとつを川
心ひとつをかハしまハ心をかハす
儀也水の流てとハ水ハたえぬ水流れ
いそ捌(?)まりしへてりりしもしよる
心也られてみあよと云義をハ為流ま
志ゐて不聞と云く
とひひるまとその根いまくわ

なほの詞難心は哥ふり宗の事をさ
遠く数ふる哥也かくハいつハなきとや
かへす哥行て添ふると也思ひかへした
るかよや

秋のよの千夜を一よになすらへ

是ハ心明也只人ニあく世あらしと
云事をかく讀ならし奮のとかく
る也此雅業の礼楽せん月や黒さと忘き
んなといへる哥数也

秋のよの千夜を一よになせりとも

是も心は明也詞のうわてとれ程のこ
とをかゝるハきと云義也

一 首の中をうひ
ゐ中ふりよひ住事也祭良孔京なと
このや人孫こともも男ハ業平也女ハ之巻
り
女也

筒井つゝ井つゝにかけしまろ
り
つゝつ筒井つゝとハ童詞也梓弓檀弓槻

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-047
国立国会図書館

けさうして身をはつくろひやさしき
き海せ古ゝには琴をかきならしてなと
え殊ありれなるへし
風ふけは奥津しら波立田山
おきつ白波は盗人乃事に昔よりかい
つゐてにはあまたと見は只立といはん
とそ奥つ白波といふおきつ白波といは
んとて風ふけりといへる是序せ心は
え堂ゝ女まうしよ成て業平とあひ

うつゝとも恥なけきて二こゝろの水
まも思ひ出しるてく国を隔て過
行山ハおわ隔りまさりくる事しも
猶やこゆらんといへるをよく思入て
吟味をいへき也愚父も此哥は哥難本とい
ひけ能く思へし白河院立田當事顕昭
定家同意なり

心
よくも隔るわけきこ
心よくきこ事もなけれとゝ也

て隔りしいひりぬ
古注よハ実ことゝるまあらす成敗ること
する心也云く當流よハ此説ハ拙き説乃
俳諧也成敗するまても幽玄あらす
思ひあわこつきいんハ弱
是ハ万葉の哥體古哥を我思心よあへ
ハ詠し云事常乃事也あわれつき
採よ也次よへのまぬ物と云哥も古哥
也心明なるハ注よ及ひん

やまのゝ人らんとかわ
業平事也此段ハ有恒か女と云も有之
さハ貞女の名誉をあらはする所也
一昔男かたゐ中
田舎ハいつくともなし　男ハ業平也
みやつかへしに　京へのほる也
いとねんころに　ことに人に契る也
此男きたる　業平外来也
此戸あけた給へ

んハ首より君にかゝるといへる儀也ト
ハ引持来京の我方へかゝる地なきハ詞計
孫にかゝるといふによりある也
去りなからて　去かふ心の切なる也
志の詞ある所　子細なし
とよひのたらして
指の血にてかくせ途中乃事あるらし心ハ
只切なる儀也
あひ思はてかれぬる人をとゞめ

我ハ思へと人の思ハぬをあひ思ハぬ
と云也其男消えつるといふ詞に死する
にあらし思の限なる事を云也涙の詞
いろ〳〵に成にしわと云も思ひの叶ハ
ぬ心也

一昔男有りけりあはしともいはさりける女
のさすかなりけるかもとに
女は業平を恨る心にや
秋の野にさゝわけしあさの袖
あはてこし夜とハ人はもとへハいけと
あハぬ独寝せし事也あさの袖ハ別れ
袖也心ハ秋乃野の篠も朝も露おほき
物なれと猶あはぬ夜乃ぬるさの袖ハ
ぬれまさるとの心也
色このみなる女
詠ともなし古今にハ小町とあり
みるめなき我身をうらとしらねは
みるめなきとハ此女中将にみえぬ儀也

見えぬハ中将ふうりける事しあまたハ
也されハ或男えぬハそれかこれ難すてあ
れハ我身をうらめしとハ思ハてふ
とあしたゆきちうハきぬ添そへい
へる心也我身とハ男の身也

一 昔二条わたり
女とハ二条后のこと也
ミいうけるの人
染殿后也悪事ハとハ業平乃ふる也

業平二条后ニ忍あることを染殿后あ
りれこまひ給し也悪らなまけかへ添
事にもありまをとけ給ふるへしう
れを業平悦ひ添なるへし
始もあれしす裡にみあとれさまく
中給二条后ニ密通してるハ染殿后以来の
しめ給へきをあまたこ給ふ給うれ
しさにおつる涙をおもあれしす袖に
みなとれさまくおこいらわ給ふかう悦

伊勢物語聞書 2冊 WA7-30 01-053
国立国会図書館

の縁をいちんとてまうこし舟もふわ
しりわにと云也よわしれしい
やすめ字也當時い竹やすめ字傳られ
うや
一むかし男女のもとに
せられともす
ぬきす
鹽乃うへに竹をあつてつかなとをさ
したる物をもふしてきよまてに

をあつふ物也
にあつふ女乃形也
こひのりけに
我なりわ物思ふ人をも文も
心わなかりけまうわみるを文もあ
らしと思へいなとよめ也
なにまられやミゆらん蛙
蛙ハ水口なひとつかけハ虫を蛙たふ
く物也鳴やめハ又鳴やむ也されい虫の
川なの鳴れなロの蛙れ鳴成也そ心を

取てそふるに思のあるハ哥おもひの
の癖うと云心也
一むかし色このみなりける女　誰ともなし
なましかくあふことのなるに成に
あふことのうきこといあふよかきわたれける
きせ朝字也つまむに賛よみくへてよめり
心ハ切に契ーことにかゝふこゝまくみ
うきなれらしく詠なきのし也
一昔意の女ハ

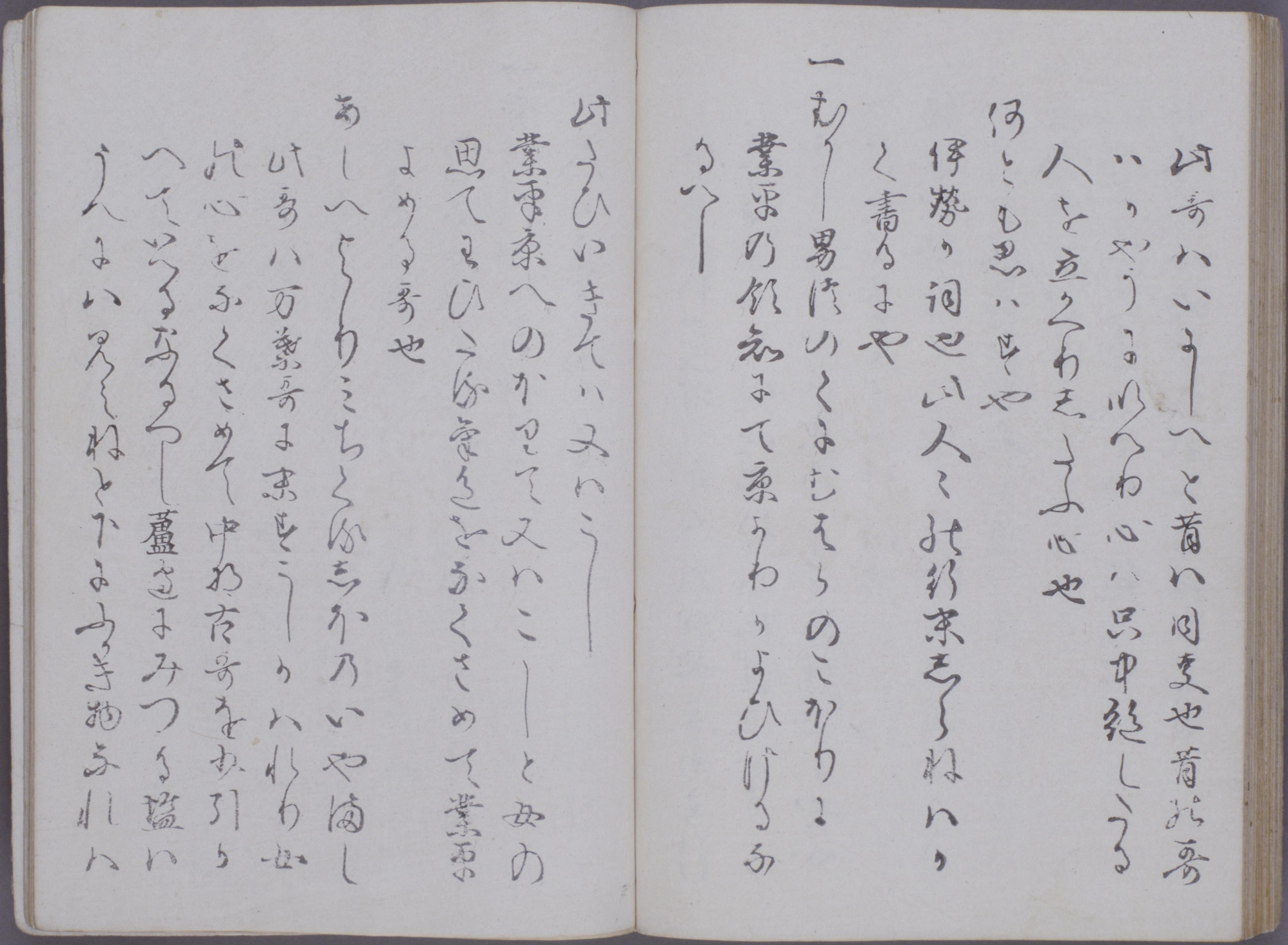
いふとつよくハあらて大やうよう
ちぶりめて云へし餞情りきわかへし
一昔男ありつゝなりわけける
かのうふに逢たるぬなるへし
あまくもハ玉乃をりよりおりかれし
逢事ハ露りうわかにて思ハ切なるか也誠
年哀みつき哥也齋乃ありさまやよく
吟味ハへし
一昔宮仕うち

藥中乃変也わうらくかハ業平乃變也
よし　や草葉ら
かく云心ハ悪の草於荒紫なくも紋ま
あわて結句事を思て業平まよろへ
てハいかしてうらむる心也
侍ミもなき人をうけへはるとれ
つミもなきにとかもなき我身をと云
せうけへとれハ此語ハ心也女これなかう
うらむるをかくいひなすや　なれかう

へまとれハ忌著於我人此心也らわまけ
忘草とゝ云ハ此女中於於忘けるをうら
ミてうしや草葉乃かと云けるまやゝ
はたく華そうわ於儀也
強るむ女も　かくいひかいひをうる
りうにねたむ人も死へし
一
番物ハいひけり
番更語あわてとれしと絶て也
いまし八乃志る於なる海陀くわ

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-057
国立国会図書館

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-058
国立国会図書館

まつ思心まさるとハいふ也
こもり江に思ふ心をいかてそ
こもり江とハ古江なとの奥なるところを云
てみえぬを云也 心ハ下に深く思ふ心なれ
ハもよりあしへより舟をさして行く気
へまさんと云心を舟さし棹乃といへる也
あしへハ思心のしつ海りきよし也
一首 つれなかりける
人まとともあし

いへハえにいハねハむねにさハかれ
心ハいハんとすれともいはれす思ひさそ
いハねハ又胸にこちて思ひ乃切なる
心也さし神ハ見つのよわて心一つになけく
と云也 陰道なる妻人まと詞にあるよく
んひ叶ふなや
おもなくて
つれなき人おもひさめて乃心也
一首心ふかくあつて

玉のをゝあを緒によりてむすとハ
玉の緒とハ命なる事とおほくいへとも只緒
とハりんゑめ也あを緒とハあをきた
ゆ緒也心ハ只かるき糸なとのやうにふ
くゝりくゝりて不絶して後も逢んとよめ
る

一　昔忘ぬるにやありと問ふに
問也昨日をやうなるゆへや
答せんこゝ峯までをくる添玉りけり

此哥ハ万葉ニ答せんこゝ峯におもひいる
玉つゝゑえんの心を思ハなくに
とりつる哥をすこしかへてよける
心ハ只なゆましきと云儀也上ハ序
哥也詞も縁物優也

一　昔色このみなる女
好色まそあるくしき女なるへし
歟かしてひとくに記かか
歟かしてしく人にとくいも人を殺に

と云心也花にても下ひもとくへはかく
云也朝かほの夕かけまたぬとハあれ
心ハあるましくて夕をもまたすうつろ
やせんといふ心也
ふたりしてむすひしひもを獨
此哥ハ前の哥にうらみられぬるを深
してよめる哥也ふたりして結ひ
しといへは契を他にうつすましき
か也

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-062
国立国会図書館

きけハ此別の時こそ人乃かなく心ハ
老たる人の死するハせめてし也此文ハ
年を経るまゝハいとなけく也まかく
てうせ給ふかなしミてなく泪をさき
けといふ心にて云也
いとあハれなくそやゆるとあり
いとあハれになく事ゆきとハ彼[illegible]子
の思ふ人のなけきて泣うきこゆると
此人ハ中将の泣声を聞と云返しに

これハかくいふ也此下心ハ命ハ消ると
いふも諸界の不大に火ハ消る物とも
しらせと云心也人に一方ハ地水火風
空をむさいれて人ゝ方をうくる物也此
あまうけへるも諸界乃不大ゐ小ハ死
するも又空のうちと云也
あさうあはれけり
其に心也をくによめると也
いたるハ順のおかちなわ

此詞心ハはらし順ハ村上御時の人
也順人乃涙しへるあるし但読ぬ此
みこれかいふし
此詞又上にてりすみをうあけられて
きこのや心ハ同親王乃ことあさなき後
やう也歎ハまへるてり也時理にけりぬを
きらふ也
一昔男ありける男
業平也けしうかすしからぬ也

伊勢物語聞書 2冊 WA7-30 01-064
国立国会図書館

ぬと思ひけれ
業平か此女ハ乳母のやうなるとみえけれ
人の子なれハ
業平は事也さる人の子なれハとぞ
なひやらんとすなをとしむるいきか
ひなくなくうらむるゝのふき事也
かめて書け此心殊勝の心也
女もいやしけれ
上乃詞ハ下すしらぬこあわいや

しきとハ年わうき事也御覧無無
ぬ當之儀也
思ひハいや海ほりに
業平が思也をひりつへたていさむる
心也
ゐていてゝいぬ
ぬをおやれゐていたす心也
ゐていなハたれか別乃かふりし
不文字ハ彼女をひかすす事也
誰り

別乃かなしからんとハ我も世にあらハへ
んことあるまし物ハ我もまたかなしからんさこと
云心也それハありしにまさる物ハ
ら郷しとゆへかなしきされた
のむつことあまはせ也
たえいりにけれ　絶入しテ死也
おやあわてまどわ　女のおやの変也
ねんしける
今めかやうにとよむへし云々ぬす

ふかく思てよむ
業平ニ思てよむとせ也
昔のわかき人ハ
伊勢カ詞也いハ世の翁とハ世の末ヲ云
人を思ふこころをかくいはぬよし也

一　昔女
はらからふたりありけりひとりハいやしき
男貧しき
ひとりハあてなる男

業平也此女ハあねと云とうんのきぬ
袍也
さるいやしきわざも
あそれなる孫也三従の心也
ろうけうの　六位の袍也又そうや
業平色このむ時ハめもある
業平色こ袍とハ我思女ニ寵愛ノ時を
云也思人ハひとわゆくすゑもゆかりを思
あはれと思よし也業ハ武蔵野ゆゑに

あるる草也女まゐとへいる物也野わくる
草木とハ様ゆかりの心也
むさし野ハ心なるへし
伊勢ノ詞也一もと都ハ武蔵野心也
若男色このゝとよるへく
好色なる女なるへし
まくるいふあらちかなれ
好色の人あるあまとりとも也此條の詞
よくしるへし

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-068

国立国会図書館

女ハ思人の我ニ先ニ疑て他人ニ
かよふ儀也と読時ハなとかへて詞
うとまれぬことハ切ニ思へどうとまし
きと云心也うとましきハうつもる也
くしきをとりわて
業平乃家色をとりてし也
名乃こころえて乃田おさハ上下郭
志て乃田長とハ時鳥の別名也鶯郭ニ
たつとハ時鳥のあまたの里ニ鳴かし

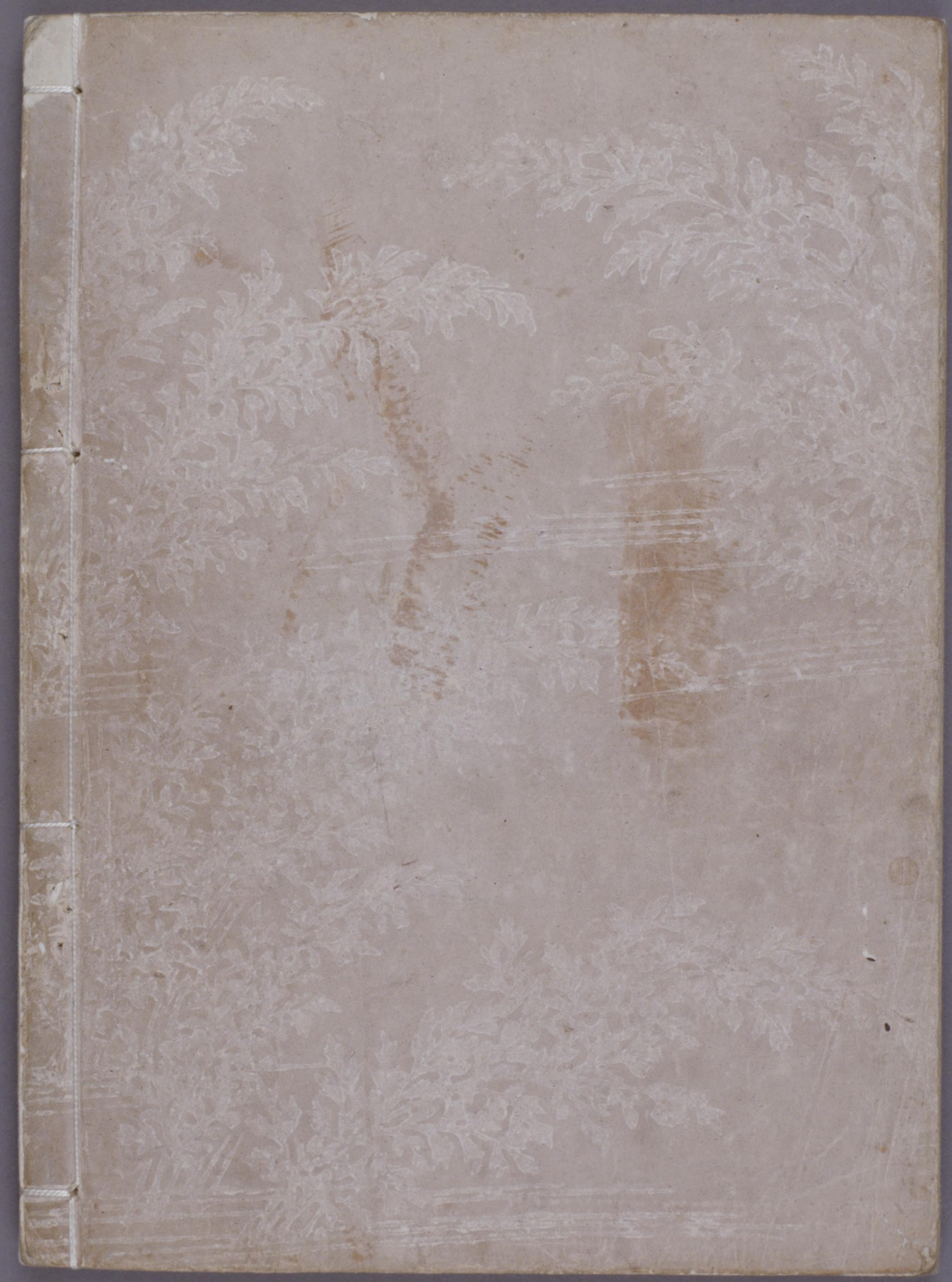
此名のたつ也是も郭公を我身ニ云ハ
てよめり心ハよそニ通てハかりすゝる
りハれてうとめしさよと朝ニ鳴とよ
めりと郭ハ別と云心也必郭ニハあしき
菴おかき志ての田長ハ家を
心ハかよふ方あまたあるとも我をまちニ思
ひてすれ彼名のまゝんと云心也

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

帝劇 かとム4

伊勢物語聞書 2冊 WA7-30 01-070

国立国会図書館



伊勢物語聞書　2冊　WA7-30　01-071
国立国会図書館